

令和6（2024）年度

俳句講座 句集

— 第5集 —

講師 倉科繁登先生

（長野県俳人協会顧問）

塩尻市中央公民館

目次

曼殊沙華	塩原	しほ	1
受験の子	山崎	政子	3
大地	清水	勝子	5
山桜	五条	さと	7
芍薬	掛橋	庸子	9
声なき声	中島	ゆき	11
常念坊	土屋	敏弘	13
冬麗の旅立	檜	椽	15
木の芽道	成瀬	綾子	17
四季のいろ	飯田	正孝	19
はこべ	かやの		21
もくりもくり	長	泰裕	23
「つうんつつつ」	青柳	信雄	25
手習ひ2	村上	カツヒコ	27
炎	鳴神	那於哉	29
健康	杉原	宮子	31

曼殊沙華

その一

塩原しほ

随道を出て綿虫の友となり

朝霧やズシリと黒き屋敷林

のぎわな
野沢菜漬を煮つける朝よ春に入る

若葉風雲の船団ゆるゆると

芍薬の卵剥くむやう開きけり

曼殊沙華

その二

塩原しほ

梅雨続く「明莉」あかりの好きな赤い傘

夏来たる軍足白く洗いたり

白桃の仄かに紅きひとしづく

夏草や琴の師匠は伏せてをり

曼殊沙華姉の命の永らへよ

受駿の子

その一

山崎政子

たんたん
淡々と進む田植機翁の背
じい せな

芝ざくら札幌便が飛び立てり

水色は優しき母の四葩かな
よひら

くろくもあ
ガツガーと黒雲開きて梅雨終はる

換気扇グアングアーン回し秋刀魚焼く

受駿の子

その二

山崎政子

綿虫の宇宙遊泳小さき庭

雪積もる光まぶしき金平糖

ガシユガシユと竹輪蓋打つおでん鍋

ふた

なべ

寒中の満月漆黒を照らす

消して書きましたも消しをり受駿の子

大地

その一

清水勝子

鈍行のごとくに散りし桜かな

地の底のぼろぼろ燃ゆる大暑かな

たましひの濡れて沈みぬ木下園

波音の満ちくる如し星祭

秋気澄む心平らかたいらかに

大地

その二

清水勝子

残る虫鳴くだけ鳴いて闇深む

大雪や闇しんしんと村沈む

雪虫の空に境界なかりけり

山里の奔流となる吹雪かな

寒雷や大地に音を叩き込む

山桜

その一

五条さと

百年の山河見つめし山桜

七夕や見えざる国に手を合はす

蝉しぐれ流れし時を惜しみけり

人を恋ふ日はよみがへり星月夜

齡へて盆に心をおきにけり

山桜

その二

五条さと

大地打つ疾風去りて稲の秋

粟割りて山の年月聴きにけり

争ひは結ぶすべなし神の旅

明けぬ夜の独り登れば富士に雪

寒見舞とほき灯を想ひけり

芍薬

その一

掛橋庸子

山葵田の水車ゆるりと時刻む

田植急して長閑な風の中に立つ

新しき鎌に弾ける穀雨かな

芍薬や十二単衣の丸模様

和宮座したる部屋よ松落葉

芍薬

その二

掛橋庸子

稲穂垂れ村は静かに脈打てり

綿虫や暮色の中へ紛れゆく

初雪の朝は真珠の光なり

霧訪山へただただ落葉踏みしめる

水面冴ゆ映りし山の近さかな

声なき声

その一

中島ゆき

山葵田の季節手繰りし鋏の光

麦秋の声無き声や飢ゑるガザ

山々の角取れ初夏の水鏡

デパートの小さき手の跡花氷

寺山の読経うねりし送り盆

声なき声

その二

中島ゆき

ヒラヒラといづこへ向かふはぐれ蝶

赤と黄の色も美味なる菊なます

見晴かす鉢伏山の雪丸く降り

公園の春待ち顔のすべり台

目覚めよと風は木の芽に微笑みぬ

常念坊

その一

土屋敏弘

常念坊とつくり持ちて山葵田へ

田植終ゆ電車送さに走る影

紫陽花の色に送られ発つ電車

ミサイルの飛び交ふ宇宙星祭り

電車来て右往左往の盆の客

常念坊

その二

土屋敏弘

神の子の紙切り散るや雪となり

どんど焚くダルマ火がつき睨みをり

わが命ひとつ縮みて寒に入る

空ろ木の芽吹き初めたり二つ三つ

各々が騒ぎ出したる雑木の芽

冬麗の旅立

その一

檸檬

せせらぎを買ってきました花山葵

風光る「成瀬」は近江の海超ゆる

かよひ路のたれにも逢はぬ濃紫陽花

望郷の秋蝶夕日の中に消ゆ

川風をもてなしてをり夏料理

冬麗の旅立

その二

檸檬

胸中に地震の棘あり寒の月

登山家の魂故郷へ鳥渡る

一村を包む煙や豊の秋

ヒバクシヤはオスロへ冬麗の旅立

日記買ふ背筋が伸びる一行目

木の芽道

その一

成瀬綾子

白木蓮の風手繰り寄せせしレナーデ

モンゴルの草原の風草紅葉

綿虫や雲の切れ間に穂高岳燃ゆ

段々と頑固一徹の枯芒

木曾駒ヶ岳の初冠雪やシヤッターの娘

木の芽道

その二

成瀬綾子

躍動の目あり口ありどんどの火

クリスマス顔見たかったと友の云ふ

ちよこちよことママ友の見や寒卵

お揃ひのパステルカラーや木の芽道

三つ編みのハイカラさんや卒業歌

四季のいろ

その一

飯田正孝

無人駅降り立つ先に七変化

ヒマワリや倒れてもなお空にらむ

焼かれても上目遣ひのサンマかな

綿虫を知らずに過ぎた八十年

能登の街瓦礫手つかず雪の下

四季のいろ

その二

飯田正孝

天辺はやっぱりだるまどんど焼き

顔知らぬ兒も跳ね回るどんどの輪

御神渡お告げ見送り明けの湖

うみ

ひっそりと木の芽淡く棘の光

木の芽どき濃淡ぼかす峠道

はこべ

その一

かやの

春一番畝のマル子が竜と化す

朝日うけ山をしよい上げ葱ぼうず

新じやがのできを猿から教えられ

散水の虹の向かうにトラクター

裏山に声響きをり盆の花

はこべ

その二

かやの

長雨やくさるなトマト我が心

綿虫や売られる牛のシツポ揺れ

雪しまき岩垂原に道はなし

寒刺さる赤御嶽に馬の息

春一番アルプスカすむ砂の陣

もくりもくり

その一

長泰裕

綿虫に世の行く末を問ふてをり

千枝の空に浸かれり田植衆

様々な丸き背くぐる茅の輪かな

駘句まるめ放物線や雲の峰

観る者の生死は問はず盆の月

しようじ

もくりもくり

その二

長泰裕

蛸の声降り積もる重さかな

月光や見破られたる嘘ひとつ

柔らかく団栗落つるトタン屋根

銀杏落ち葉の思ふ存分黄なりけり

揺るるたびもくりもくりと木の芽張る

「つうんつつつつ」

その一

青柳信雄

すりわさび「つうんつつつつ」香り立つ

春耕やトラクタの吾子したり顔

七夕や富士山ふじの高さの願ひ事

虫刺され夢か現か彷徨ふ手

公園に子どもがおらぬ夏休み

「つうんつつつつ」

その二

青柳信雄

龍のごと駆けるいかづち押し迫る

木から木へ傷跡掬ふ漆搔き

今年また探す漢字の師走かな

香りきてついついかじる子のゆず湯

寒の雨湖底に消えし神の道

手習ひ2

その一

村上カツヒコ

常念に一味ピリリわさびかな

風かよひ顔もほころぶ田植かな

紫陽花やけだるい雨の昼さがり

星祭りと云えども今日も雨の空

盆踊り今や世界で楽しみに

手習ひ2

その二

村上カツヒコ

どんどの火君を思ひて身を焦がし

山間に平和みなぎる稲の波

武蔵野や風の音しみる草もみぢ

あづさ川舞うは小雪か綿虫か

百年ぶり何も動かざりし里の雪

炎

その一

鳴神 那於哉

星祭イカのアニサキスも踊る

祭壇の五如来戦ぐ盆の月

迎え火や停まる廃品回収車

君の居ぬ十一日目稲を干す

よく焼けた煎餅色の草紅葉

炎

その二

鳴神 那於哉

朝の駅綿虫止まる左肘

初雪や星なき空の流星群

左義長や点火の爺の富士額

ふるさとは寒月の下列車来る

ドブネズミ使いと分ける木の芽和え

健康

その一

杉原宮子

ぬくぬくと寒さ知らずふとん中

初雪と初入院で心淋し

雨降りて木の芽ふくらむ冬終わり

蝻梅や香り散らして友を呼ぶ

七夕の五色の短冊健康願ひ

健康

その二

杉原宮子

せみが鳴く猛暑つづきでしやがれ声

猛暑にてきらわれ台風大歓迎

地区講座入学できた杖ついて

子や孫の入学終わりで年をとる

髪染めた外出できぬ大雪だ

おわりに

塩尻市中央公民館俳句講座の句集第五集ができあがりました。一年間の講座のまとめとしての句集です。

私は、俳句を学び始めて二年目です。まだ仮名遣いを間違えたり、過去に作ったものと同じような句になったり、なかなか作れなかったりで、悪戦苦闘しています。

それでも、倉科先生のご指導や受講生の皆様の個性豊かな句、私には思いつかない表現などから、たくさんのことを学んでいます。

この句集が、受講生の皆様の足跡をしっかりと残すとともに、お互いに学び合いながら新たな一步を踏み出す、そんな句集になればと願っています。

本講座の講師倉科繁登先生には、一句一句について丁寧にご指導いただきました。その成果がこの句集に集約されています。この場をお借りして感謝申し上げます。

令和 七年 三月

俳句講座句集 (令和6年度)

第5集

令和7年3月31日 発行